トラベルビーの看護論に関する一考察

－「体験の意味」及び「人間対人間の関係」について－

合　田　冨美子

はじめに

筆者は，1978年に「看護の本質を求めて」と題し，筆者自身の看護についての思索の経緯と，そのたどりついた看護観の論拠を，トラベルビーの看護の定義の中に見出したことを述べた。そして今後の課題として，(1)個々の事象をとりあげ，意味内容を探っていきたい。(2)更に広く多方面の著書に接し柔軟に思索していきたい等，数項目を挙げ，爾後，探究を試みてきたが，今回，トラベルビーの看護の定義に述べられている，「体験の中に意味を見つけ出す」の『意味』と『人間対人間の関係』について，その意味，内容を明らかにするため，文献に基づいて考察を行った。

Ⅰ　「体験の中に意味を見つけ出す」の意味について

1. 問題提起

トラベルビーは，その著者「人間対人間の看護」の中で，「看護とは，対人関係のプロセスであり，それによって専門実務看護婦は，病気や苦難の体験を予防したり，あるいはそれに立ち向うように，そして必要なときにはいつでも，それらの体験の中に意味を見つけ出すように，個人や家族，あるいは地域社会を援助することである」[1]とトラベルビーにあっては，看護の目的を，ニードの充足，日常生活の世話あるいは生活への適応をはかる等にとどまらず，病気や苦難に立ち向い，病気や苦難の中に意味を見つけ出すように援助することであると云っている。そして更に，「病気とは，もし病人がこの体験の中に意味を見出すよう援助を受けるならば，その病人にとり自己実現の体験となりうるような生活体験である」[2]と病気や苦難の体験の中に意味を見つけ出すことができるなら，それは，その人にとって，自己実現の体験になりうると述べている。

筆者は，この文脈において「体験の中に意味を見つけ出す」の意味をどう解釈すべきか，現実にどういう人間の在りようが，苦難の中に意味を見つけ出すということなのか，そしてそれが自己実現の体験になるとはどういう実態を指すのかが，明確に把えられないものかと考えるのである。因みに同著書の記述では，「意味というものは人間の中に生ずるものであって，その人がそこに自分を見出すところの場面の中に生ずるのではない」[3]また「意味は，生活体に固有のものではない。特定の体験にひたり，それを生きる人間だけが意味に到達するのである」[4]と述べられているが，これだけの解説では，意味の実態が把握し難いのである。

2. フランクルの「夜と霧」に意味を探る。

そこで，同著書がフランクル博士の立場に基づいて執筆されているということを手がかりに，その著書「夜と霧」の中に意味の実態を探ってみた。

云うまでもなく，フランクル博士は，第二次世界大戦下にあって，アウシュビッツ強制収容所に囚われ，言語に絶する苦難を体験し，その中において，精神科専門医師の目を通して，極限状況にある人間を見据えてきた人である。

ナチ強制収容所囚人という特殊な状況下で，そこには，「創造的及び享受的生活は囚人には，とっくに閉されている」[5]という事態にあっても，「創造的及び享受的生活ばかりが意味をもっているばかりではなく，生命そのものが意味をもっているなら，苦悩もまた一つの意味をもっているに違いない」[6]と外的にはその自発的意志や活動の一切の自由を奪われ，生命さえも危機にひんし，そこに体験されるのはただ苦悩のみの日々であるという状況であっても，生命としてなお存在し，それが意味をもつなら，その生命に属する苦悩もまた意味をもっているに違いないと云うのである。

そして，「義(ただ)しき苦悩の中には一つの業績，内的な業績が存在する」[7]と疚しさのない，むしろ正義に立つ苦悩の中には，達成すべき業績，内的業績がある。即ち故なく囚われ，理不尽の中にあっても，なお人間として医師として正しくあろうとする精神的な自由，豊かさの中で苦悩することは，一つの事業の達成であるというのである。

そして，その内的業績を達成するにはどんな方法があるか，それは「一人の人間が，どんなに彼の避けられない運命と，それが彼に課する苦悩とを，自らに引受けるかというやり方の中に，即ち人間が彼の苦悩を，彼の十字架として，いかに引受けるかというやり方の中に，たとえどんな困難な状況にあってもなお生命の最後の一分まで，生命を有意義に形づくる豊かな可能性が開かれているのである」[8]とこの苦悩を運命として，いかに引受けるかというやり方如何で，生きていることを意義あるものにすることができる。苦悩を自ら引受けるということで内的業績を達成することができると提唱するのである。

そして，「ある人が，勇気と誇りと他人への愛をもち続けていたか，それとも極端に尖鋭化した自己保持のための闘いにおいて，彼の人間性を忘れ……羊群の一匹に完全になってしまったか」[9]の選択は，彼らに残されているのである。

更にフランクルは，「具体的な運命が人間にある苦悩を課する限り，しかもやはり一回的な運命を見なければならないのである。人間は苦悩に対して，彼がこの苦悩に満ちた運命と共に，この世界で，ただ一人一回だけ立っているという意識にまで達せねばならないのである。……まさにその運命にあたった彼自身が，この苦悩を担うということの中に，独自な業績に対するただ一度の可能性が存在するのである」[10]と苦悩の中に課題をみる。その課題とは，苦悩に満ちた運命と共に，この世界でただ一人一回だけ立っているという意識に達しなければならない。これが苦悩が課する課題であるというのである。

では苦悩の課する課題である「運命と共に，この世界にただ一人一回だけ立っているという意識」とはどういうことか，同著書においてフランクルは，一瞬の運命の転回によって，幾度も生命を救われた体験を記している。

因みに，収容所開放の直前に，フランクルは，同僚と二人で戦場への脱出を企てたが，同僚の到着が遅れ，計画は思うように運ばなかった。そして同僚が駈けつけた瞬間，収容所の門が開かれ，赤十字の印をつけた自動車が入って来たという。また，戦線が収容所に接近して来たとき，囚人は中央収容所へ移送されることになった。貨物自動車に全員分乗したが，何の手違いか，フランクルら二人だけが取り残されてしまった。そこで失望し，憤慨したのであったが，実は中央収容所へ移送されて行った囚人達は，バラックに閉じ込められ火を放されたということを，後日知ったのである。このように「まさに生命か，死かが問題であるような人間の決断が，どんなに疑わしいものかを体験したのであった」[11]と述懐している。

運命の岐路は一瞬一瞬に迫り，通り過ぎて行く，そして二度と同じ状況は繰り返さない。

その一回の運命に翻弄されることなく，運命に抗するでもなく，逃げるでもなく，自己の義(たぶ)しさを拠どころにそこに身をおくという心境を云うのであろうか。そしてその苦悩の運命を自ら担うということではないかと思う。

そこにその人だけがなし遂げるその人の業績があり，その可能性があるというのである。

さらに論述の引用を続けると，「われわれにとって苦悩も一つの課題となったのであり，その意味に対して，われわれはもはや目を閉じようとは思わないのである。苦悩もわれわれの業績であるという性質をもっているのであり，それこそリルケをして『苦悩の極みによって昂められし』とうたわしめたのである」[12]と云い「苦悩し抜くこと『苦悩の極みによって昂められ』うることは充分あったのである。従って必要なのは，それをいわば直視することであった」[13]と現実に遭遇した体験として，苦悩の中に意味を見つけ出すと云うことは，運命的に課せられた苦悩を直視し，苦悩し抜くということにより自己が昂められるということであると述べている。そしてこの体験がまさに，一人の人間として自己実現の体験であると云えるのである。

しかし極く普通の人間が，このように過酷な課題を成し遂げられるものだろうか。そのことに関してフランクルは「それは決して現実離れした思弁ではなかった……この考えこそ，命の助かる何の機会もないような時に，われわれを絶望せしめない唯一の思想であった」[14]と云うのである。そして，「気が弱くなる危険や，涙を流したりすることもあるであろう。しかし彼は，この涙を恥じる必要はないのである。むしろそれが彼の苦悩への勇気という偉大な勇気をもっていることを保証しているのである」[15]と苦悩を克服する過程を人間味豊かに語るのである。

病気や苦難の体験の中に意味を見つけ出すの意味を，フランクルの論述に探ってきたが，ここではじめて，前述のトラベルビーのいう意味がはっきり理解できる。即ち意味というものは，人間の中に生ずるものであり，特定の体験にひたり，それを生きる人間だけが意味に到達するということは，まさに苦悩を直視し，苦悩の中に身をおき，苦悩し抜く人だけが意味に到達するということであった。

Ⅱ　「人間対人間」の関係について

1. トラベルビーの「人間対人間の関係」

トラベルビーの云う，病気や苦難の中に意味を見つけ出すということは，病気や苦難の体験を直視し，そこに身をおき，苦悩し抜くことであり，それを援助するのが看護であると云う。

それでは，この援助の手段は何か。トラベルビーはこの援助の目的を達成するには，「人間対人間の関係を確立することを通して達成される」[16]と述べている。また，「人間対人間の関係は，看護婦という人間と，病人あるいは看護サービスを必要とする個人との間のひとつの体験あるいは一連の体験をさしている」[17]という。そしてこれは，「『患者』対『看護婦』ではなく，人間対人間として関係を結ぶためには，看護婦の役割を超越しなければならない。さらに関係というものが確立されるのは役割の超越という意味の人間対人間の関係性においてだけである」[18]と看護婦である或は患者であるという役割を超越した人間対人間の関係において援助が可能なのであると云っている。

2. 人間存在のあり方

それでは役割を超越するとはどういうことなのか，これを谷口隆之助氏の論述から探ってみようと思うが，その前に谷口氏の論述の概略を解説しておきたい。

谷口は，その講演をまとめた小冊子「人間存在のあり方」の論述において，人間存在のあり方を「生物的次元」「文化的・社会的次元」「存在の次元」の三つの次元に分分け「この三つの次元を同時に生きている」[19]のが人間であると云っている。

その一つである「生物的次元というのは，簡単に云えば，人間それぞれ生物体として生存している。その生物体としての在りようであり，その次元においてわれわれも，他の動植物と同じように生物体としてのさまざまの欲求をもっている」[20]とまた「生物的次元においては，自分の体を維持しよう，自分の生存を維持しようとする欲求や主張は，自然的な状況では，全部自己主張になる。自分が生きようとすれば他の生きものを殺さないと生きられないし，自分が生きようとすれば，他の人を押しのけないと生きられないという状況が自然的な生の状況だと云ってよい」[21]と生物的次元は，生存のために自己主張のぶつかり合う，自己中心的な次元であるという。

次に文化的・社会的次元というのは，どのような次元なのか，「それは簡単に云えば，自然的生の次元における自己中心性と，そのためのお互の直接的ぶつかりをなんとか避けようとする人間独特の在りようの次元だと云ってよい」[22]また「人間が一個の生物体として生存しつつ，さらに生活者として生き，またお互にかかわり合う在り方だと云ってよい」[23]と云い，「根本においては，あくまで相対の世界であり，本来の『存在としての私』の世界ではない……『役割における私』の世界だと云ってよい」[24]と文化的・社会的次元を論述するのである。また生物的次元との関連性を「自然的生の次元というものが，直接的な自己主張とぶつかり合う次元だと云ったが，そういう点から云うと，この文化的・社会的次元とは，さまざまの価値追究の次元であり，またさまざまの価値づけの次元だと云ってよい。……自然的生の次元では，お互にぶつかり合うだけの生存と生存が，その単なるぶつかり合いを避けるために，お互に共通の価値を立てることによって，お互にその価値に向って自己実現していくというのが，文化的・社会的次元における人間の存りようである」[25]と共通の価値を追求することにより，人と人との直接的ぶつかり合いをさける仕組が，文化的・社会的次元であるという。そしてこの次元における価値というのは「有用性ということにおいて決定されてくる価値であり，役に立つものは価値があり，役に立たないものは価値がないという考え方は，文化的・社会的次元における考え方，また発想の特徴である」[26]と述べる。

では最後に，存在の次元とは，どのような次元をいうのか，「たとえば，生物的次元に属する身体が病み呆うけ，衰弱し，それでもなお生きてそこにある限り，そこにある私。あるいは社会的次元において，いろいろな役割を離れ，地位とか名声とかもすべてなくなり，財産もなくなって，なおそこに生きている私。そういう私というものは，存在次元における私として自分ではっきり洞察し，自分自身で引き受けて生きる私なんだということである。むしろそれは自分自身しか引受けられない自分自身の存在としての私だと云ってよい」[27]そしてそれは，「端的な事実としての存在である私」[28]である。この論述では理解しやすいように，生物的次元，文化的・社会的次元を消去し，なお生きている私，と存在次元を露わにしてみせてくれているが，現実にはこの三つの次元を同時に生きるということであれば，いかなる現実からも逃げることなく，事実としての自分を引受けていくという態度を根底にもって生活するということであろう。

このように谷口の論述をみてくると，前述の苦悩に身をおき，苦悩し抜くことによって意味を見つけるという在り方は，この存在の次元に通じているように思えるのである。

3. 役割を超越するとは

さて，体験の中に意味を見つけることを援助するには，人間対人間の関係によって援助できると云い，この人間

対人間の関係は，役割を超越したという意味での関係であると先に述べた。

筆者は，役割を超越するという場合の役割とは，谷口のいう文化的・社会的次元を指すものと考える，即ち役割とは相対の世界であり，代理可能な世界である。そしてそれは，価値追究の次元であり，有用性の尊重される次元である。従ってこの次元での他人との関係は「価値を媒介としての関係であり，生きたままの人と人との直接の関係は，この次元においては原理的に不可能なのだ」[29]と役割の世界では生きた人間の直接的な関係は，原理的にもてないことを明らかにしている。従って苦悩の体験の中に意味を見つけ出すというような大事業を援助することなど，役割だけの関係では到底成し遂げられないことなのである。そこで役割を超越するということが求められるのである。

それでは役割を超越するとはを問うと，谷口の云う存在次元に生きることを指しているように思う。即ち「端的な事実としての私」「代理不可能な存在としての私」を自分で引受けて生きている一人の人間の在りようということである。そして「自分がそうであると同じように，ひとりひとりの他人も，かけがえのない存在，代理のきかない存在としてきちんとみるということ，遇することが根本的に大切だということである」[30]そしてこれは，「実は私たちが生きるという究極の次元である」[31]また「事実としての自分の存在から自分の生を出発させるということをしないと人間は本来の生を生きることができなくなるという性質のものだ」[32]ともいう。

これらのことについての筆者の解釈を述べると，事象としては，看護婦という役割をもった一人の人間が，一人の患者にかかわるのであるが，かかわっている今は，看護婦であるという意識を越えて，かけがえのない生を生きている私を実感する。即ち役割を果すという意識でもなく，他からの賞讃のためでもなく，役に立つからというのでもなく，本然の自己を自覚し，相手を敏感に感じ，相手とのかかわりを体験している自分。この自分を洞察し，引受けている自分として患者にかかわるということではないかと思う。そしてこの体験は，こうあるべきとか，役に立つからといった理念或は価値が先行するのではなく，自分の存在から出発するのである。これらに基づく行動は，恣意的に，わがままに振舞うということは全然別のものであり，むしろどんな体験にも恐れず，避けず，わだかまりのない自分を表出していくという在り方ではないかと考える。

4. 人間変化の原理

看護は，役割を超越した人間対人間の関係によって援助するということであったが，このような関係を体験することによって援助が可能であるという原理はどこにあるのだろうか，谷口は，「私たちが人を知るとき，私たちは必ずその人との生きた関係の中に身をおくことによって，その人を知るのである。しかも，人と人との関係は，人と物との関係とは違って，あくまで相互的であるということに特徴をもっている。それゆえ一つの関係の中で，相手を知るというとき，私もまた相手に知られるのであり，お互にひとつの関係に参与しあい，それを体験しあいながら，お互に深く知り，お互にわかり合っていくのである。

そしてお互がわかり合うということは，お互が自分だけの世界を歩み出て，ひとつの世界において，お互が〈出合う〉ということを意味する。それゆえお互が変るということなしに真の意味で人を知ることはありえないのである」[33]と真の意味で人を知るということの構造を解説するのであるが，生きた関係，即ち具体的な「わたし」と「あなた」という関係において，好意や親しみを感じ合いながら，ことばのやりとりの中でお互をわかり合うのである。そして私が相手を知ると同時に相手も私を知るのである。こうしてお互がわかり合うということが，既にその時点でお互が変化しているということなのである。この関係の中で変化するという現象が，援助の根本原理であると考える。そしてこの原理はカウンセリングの原理にも通じるのである。

トラベルビーもこのことについて「相互作用の結果として，連続した運動や活動，あるいは変化がおきているのである」[34]また「目的をもち，進歩した思慮深い方法で変化を確認し，かつ変化を生じさせるのが看護活動である」[35]と云っている。

ここで，人間対人間の関係において援助することの原理が明らかになったが，谷口は更に「人間は関係の中で自・他を発見し，関係の中で変化し，関係の中でお互に了解し合うということが，私たちのもっとも具体的な，そして根本的な存在の仕方なのだ」[36]と云う。このことはまさに，人間関係の中で生き，関係の中で変化（成長）していくしかないのであって，これが援助の根本原理であると共に人間現象そのものであり，人間の存在の仕方なのである。

Ⅲ 要　約

筆者は，先に「看護の本質を求めて」と題して，筆者自身の看護観を述べ，トラベルビーの看護の定義を論拠

としていることを挙げた。そこで今回は「体験の中に意味を見つけ出す」の「意味」と「人間対人間の関係」について，その意味するところを文献から探ってみた。その結果，得られたことは次のとおりである。

1. 「体験の中に意味を見つけ出す」の意味について
   (1) 苦難の体験に意味を見つけ出すということは，苦悩を運命として，自ら引受け，苦悩を直視し，苦悩し抜く，即ち特定の体験にひたり，それを生きることであると結論づけられた。
   (2) 苦難の体験を生きる人だけが意味に到達することができる。
   (3) 苦悩の課す課題は，苦悩に満ちた運命と共に，この世界でただ一人一回立っているという意識にまで到達することであり，このことは人間にとって最大の業績であると云える。
   (4) この業績を，成し遂げるということは，とりもなおさず自己実現の体験であると云える。
2. 人間対人間の関係について
   (1) 役割とは，文化的・社会的次元を指し，この次元にあっては生きた人間との直接の関係をもつことは，原理的に不可能である。
   (2) 役割を超越するとは，存在次元に生きる即ち端的な事実としての私。かけがえのない私。そしてそういう自分を洞察し引受けて生きている個人であり，これを具体的に表現するならば，如何なる体験にも恐れず，逃げず，わだかまりのない自分を表出しているという在り方と云える。
   (3) 人間と人間の関係は相互的である。お互が知り合い，わかり合うということは，お互が変るということであり，お互が変るということが援助が実現する原理である。そしてこのことが最も具体的な人間のあり方である。

これらを総括すると，病気や苦難に意味を見つけるということは，病気や苦難を運命として自ら引受け，そこに身をおき苦難を生きるということであり，その人間的大事業を成し遂げるよう援助するには，単に役割としてかかわるのでなく，端的な事実としての存在である私，としてかかわることにより，援助が可能であると云うことであった。

おわりに

この稿をまとめることにより，一つ一つのことばの意味の深さを痛感すると同時に，具体的な在りようを吟味することの重要性を強く感じている。これからも表面的に字面を追うのでなく，納得のいくまで探って行きたいと思う。

御批判，御教示をいただければ幸甚である。

引用文献

1)	トラベルビー	「人間対人間の看護」	医学書院	P 3 (1976)
2)	〃	〃	〃	P 14 (〃)
3) 4)	〃	〃	〃	P242 (〃)
5) 6) 8)	フランクル	「夜と霧」	みすず書房	P169 (1970)
7)	〃	〃	〃	P168 (〃)
9)	〃	〃	〃	P170 (〃)
10) 14)	〃	〃	〃	P185 (〃)
11)	〃	〃	〃	P160 (〃)
12) 13) 15)	〃	〃	〃	P186 (〃)
16)	トラベルビー	「人間対人間の看護」	医学書院	P 18 (1976)
17)	〃	〃	〃	P 19 (〃)
18)	〃	〃	〃	P 63 (〃)
19)	谷口隆之助	「人間存在のあり方」	人間の原点を考える会	P 2 (1981)
20)	〃	〃	〃	P 3 (〃)
21)	〃	〃	〃	P 5 (〃)
22)	〃	〃	〃	P 8 (〃)

23）	谷口隆之助	「人間存在のあり方」	人間の原点を考える会	P 9（〃）
24）	〃	〃	〃	P 10（〃）
25）	〃	〃	〃	P 12（〃）
26）	〃	〃	〃	P 15（〃）
27）	〃	〃	〃	P19～20（〃）
28）	〃	〃	〃	P 25（〃）
29）	〃	〃	〃	P 13（〃）
30）	〃	〃	〃	P 22（〃）
31）	〃	〃	〃	P 23（〃）
32）	〃	〃	〃	P 24（〃）
33）	〃	看護技術	VOL 168	P 26（1968）
34）35）	トラベルビー	「人間対人間の看護」	医学書院	P 4（1976）
36）	谷口隆之助	看護技術	VOL 168	P 28（1968）

昭和58年3月31日受理